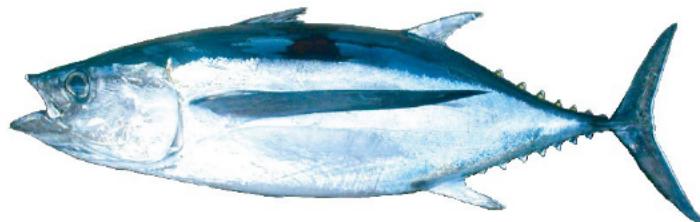


## ピンナガ 北大西洋

(Albacore *Thunnus alalunga*)



### 管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

### 最近の動き

2024年9月に開催されたICCATの科学委員会(SCRS)において、各国・地域の2023年までの漁獲量が報告され、2023年の総漁獲量は28,182トンであった(ICCAT 2024)。最新の資源評価は2023年に実施され、近年の資源状態は過剰漁獲ではなく、乱獲状態でもないとされている(ICCAT 2023b)。2023年9月に開催されたICCAT魚種別会合において、管理戦略評価(Management Strategy Evaluation: MSE)による検証を経た漁獲管理ルール(Harvest control rule: HCR)を適用して2024~2026年の総漁獲可能量(TAC)が47,251トンと算出され(ICCAT 2023a)、同年の年次会合にて、このTACを含む勧告改定が採択された。我が国には、メバチ漁獲量の4.5%に北ピンナガの漁獲量を抑える努力規定が引き続き適用される。

### 利用・用途

主に缶詰原料となっているほか、近海で漁獲されたものは鮮魚としても販売される。また、近年日本のはえ縄船が高緯度域で漁獲したものの多くは、日本において刺身用として利用されている。

### 漁業の概要

北大西洋のピンナガは、ビスケー湾でスペインのひき縄及び竿釣りによって、またアゾレス海域でスペイン及びポルトガルの竿釣りによって古くから漁獲されてきた。はえ縄による漁獲は、ひき縄・竿釣りといった表層漁業による漁獲よりも少なく(図1)、その多くは台湾による漁獲が占める。これら伝統的な漁法に加えて1980年代後半以降から、新しい表層漁業である流し網や中層トロールによっても漁獲されるようになった。

北大西洋における年間の総漁獲量は1960年代中頃(約6万トン)をピークに、短い周期の増減を繰り返しながら2000年代に至るまで徐々に減少している(図1)。これらの減少は主としてひき縄、竿釣り及びはえ縄といった伝統的な漁法の努力量の減少による。総漁獲量は1999~2002年にかけて減少し、約3.5万トンから約2.3万トンまで減少した。その後、他の表層漁業の流し網、中層トロールによる漁獲量が増加して、

総漁獲量は2006年に約3.7万トンにまで回復した。しかし、2007年から表層漁業及びはえ縄の両方の漁獲量が大きく減少し、2009年には約1.5万トンとなった。これは1950年以降で最低の漁獲量であった。2010年以降、漁獲量は増加傾向に転じ、2023年には約2.8万トンを記録した。

スペインは北大西洋ピンナガの最大の漁獲国であり、古く(1950年代以前)からひき縄及び竿釣りで漁獲してきた(表1)。1950~1980年代におよそ1.6万~3.4万トン、1990年代にはおよそ1.3万~2.6万トンを漁獲した。2000年代には2006年に約2.5万トンを記録したが、2001、2002、2009、2011年において漁獲量は1万トンを下回った。2023年は約1.7万トンを漁獲している。

フランスはひき縄及び竿釣りで、かつてはスペインと同程度を漁獲していたが、漁獲量は徐々に減少し、1970年代には約1万トンになり、1980年代にこれら漁業は衰退した。1990年代以降それら漁業の代替として流し網及び中層トロールを行い、それぞれ2,000~3,000トンを漁獲した。2005年の漁獲量は約7,000トンを記録したが、その後2009年まで減少傾向を示した。2010年以降は再び漁獲量は増加傾向を示し、2014年に約7,000トン、2023年は約3,000トンを漁獲している。

アイルランドは1998年以降流し網から中層トロールへ漁法を転換し、1999年には約5,000トンを漁獲したが、その後減少し、2003~2010年は2008年及び2009年を除き漁獲量は1,000トン以下で継続していた。2011年以降は再び増加し、2023年には約3,000トンを漁獲している。

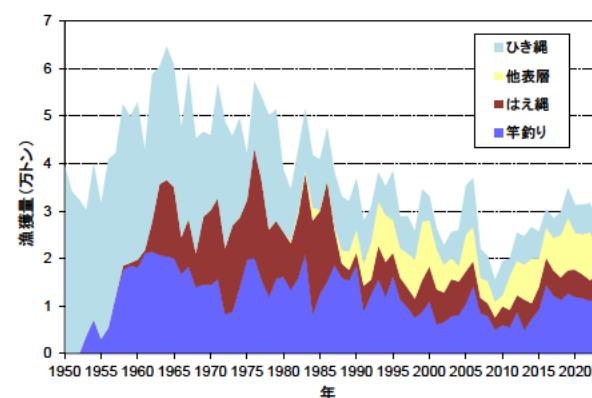


図1. 北大西洋におけるピンナガの漁法別漁獲量  
(1950~2023年、ICCAT 2025一部改変)

表 1. 北大西洋におけるピンナガの主要国・地域別漁獲量  
(過去 25 年分・トン)

年	日本	台湾	スペイン	フランス	アイルランド	その他	合計
1999	425	5,785	15,363	6,887	4,858	1,233	34,549
2000	688	5,299	16,000	5,718	3,464	1,954	33,123
2001	1,126	4,399	9,177	6,005	2,093	3,452	26,252
2002	711	4,330	8,952	4,320	1,100	3,303	22,716
2003	680	4,557	12,530	3,456	755	3,589	25,567
2004	893	4,278	15,379	2,444	175	2,787	25,957
2005	1,336	2,540	20,447	7,266	306	3,423	35,318
2006	781	2,357	24,538	6,559	521	2,207	36,963
2007	288	1,297	14,582	3,179	596	2,049	21,991
2008	402	1,107	12,725	3,009	1,517	1,722	20,483
2009	288	863	9,617	1,139	1,997	1,487	15,391
2010	525	1,587	12,961	1,293	788	2,257	19,411
2011	336	1,367	8,357	3,352	3,597	2,980	19,989
2012	400	1,180	13,719	3,370	3,575	3,189	25,432
2013	1,745	2,394	10,502	4,625	2,231	3,173	24,671
2014	267	947	11,607	6,716	2,485	4,617	26,638
2015	276	2,857	14,126	3,441	2,390	2,544	25,635
2016	297	3,134	17,077	4,229	2,337	3,326	30,400
2017	366	2,385	13,964	4,191	2,492	5,077	28,475
2018	196	2,926	15,691	5,824	3,102	2,046	29,786
2019	334	2,770	16,536	7,881	3,213	4,188	34,922
2020	261	3,549	16,205	4,753	2,938	3,568	31,274
2021	225	2,896	17,408	5,397	2,879	2,550	31,355
2022	280	2,806	16,870	6,387	3,374	1,917	31,634
2023	302	2,782	17,293	2,902	3,035	1,868	28,182

日本は、はえ縄で 1960 年代に 1 万数千トンを漁獲したがすぐに大きく減少し、1970 年以降はタイセイヨウクロマグロやメバチの混獲として概ね 200~1,000 トンを漁獲しているに過ぎなかった。2013 年には約 2,000 トンと過去 25 年で最も多い漁獲量となつたが、翌年以降 1,000 トンを割り込み、2023 年は 302 トンとなった。

台湾は、はえ縄で 1970~1980 年代におよそ 1,000~2 万トンを漁獲したが、対象種の変化により減少し、1990 年代はおよそ 2,000~6,000 トン、2000 年代に入つても減少傾向は続き 800~5,000 トン台の漁獲量となっている。最近 5 年間の平均漁獲量は約 3,000 トンであり、2023 年には約 3,000 トンを漁獲している。

## 生物学的特性

大西洋のピンナガは、大型魚の漁獲される海域及び稚魚の分布海域が赤道付近を挟んで南北で明瞭に分かれていること、また、標識放流結果においても南北交流の記録がないことから、南北で別々の系群が存在すると考えられている。ICCAT では、北緯 5 度線を南北両系群の境界として、それぞれを資源管理しており、北大西洋のピンナガはおよそ赤道~北緯 50 度の広い海域に分布している（図 2）。表層漁業（ひき縄、竿釣り、流し網）は、夏季にビスケー湾を中心とした海域及びアゾレス諸島海域で、索餌群（尾叉長 50~80 cm が多い）を対象としている。これらの魚群は、夏季に表層域を北東方向または北方へ回遊し、冬季には南西方向へ回遊する。近年ピンナガを主対象としたはえ縄は行われていないが、かつては北緯 15~25 度で周年にわたり産卵群を、北緯 25~40 度で秋冬季に索餌群を漁獲していた。産卵域ははっきりしないが、西部では北緯 25~30 度で、中部から東部では北緯 10~20 度で稚魚が出現している（西川ほか 1985）。なお、地中海でも産卵が見られる。索餌域は北緯 25 度以北と考えられる。

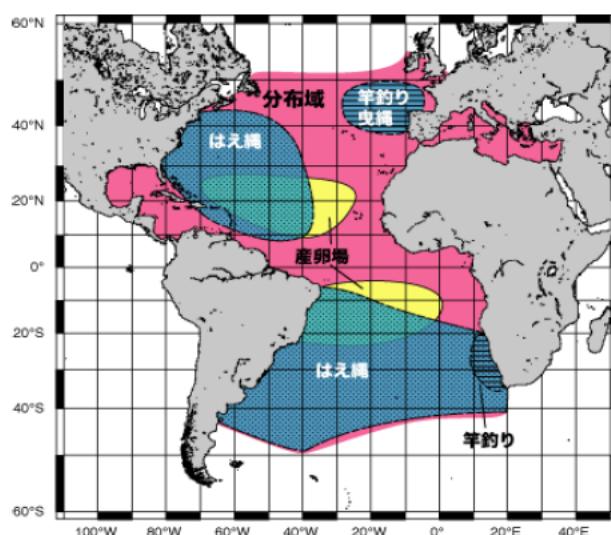


図 2. 大西洋におけるピンナガの分布と主な漁場

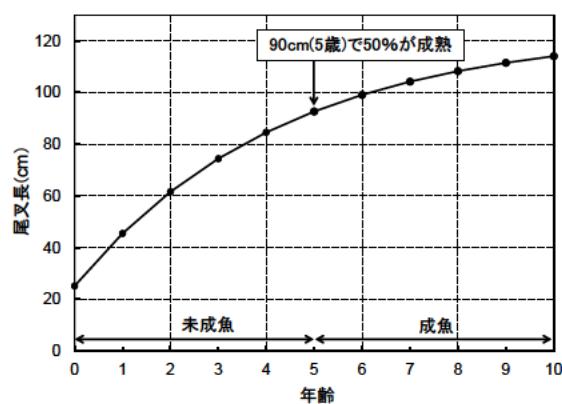


図 3. 北大西洋ピンナガの成長曲線  
(Bard and Compean-Jimenez 1980)

食性に関しては、胃内容物から魚類、甲殻類が多く出現しており、そのほかに頭足類も出現している（Ortiz 1987）。捕食者についてははっきりしないが、サメ類、海産哺乳類のほか、マグロ・カジキ類によって捕食されているものと思われる。

成長については、資源評価には、第一背鰭棘に見られる年輪を用いた年齢査定（Bard and Compean-Jimenez 1980）によって得られた成長式がよく用いられる（図 3）。

$$L(t) = 124.7(1 - e^{-0.23(t + 0.9892)})$$

L : 尾叉長 (cm) 、 t : 年齢

これによれば 3 歳で尾叉長 75 cm、5 歳で 93 cm、7 歳で 104 cm に達する。尾叉長 90 cm (5 歳頃) で 50% が成熟するとされている。体長体重関係は Santiago (1993) により示されている。最大で尾叉長 130 cm、40 kg に成長し、寿命は少なくとも 10 歳以上と思われる。

$$w = 1.339 \times 10^{-5} \times l^{3.107}$$

w : 体重 (kg) 、 l : 尾叉長 (cm)

## 資源状態

本資源の資源評価は ICCAT で行われている。2023 年 6 月にピンナガの資源評価会合が行われた。以下に、2023 年 9 月の ICCAT SCRS 全体会合でとりまとめられた報告書（ICCAT 2023a）を中心として資源評価の内容を示す。

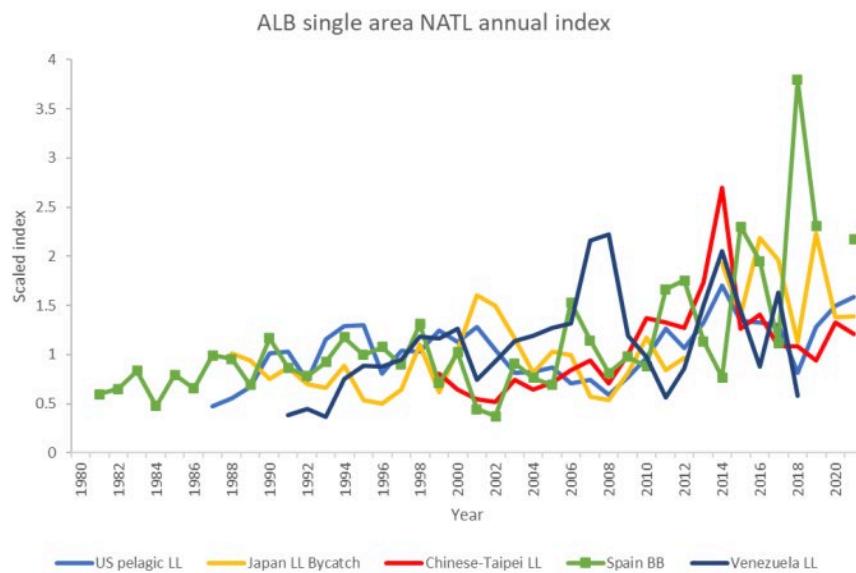


図4. 資源評価に用いられた北大西洋ピンナガの標準化 CPUE (1981~2021年、ICCAT 2023b)

青（US LL）：米国のはえ縄、黄（Japan LL）：日本のはえ縄、赤（Chinese-taipei LL）：台湾のはえ縄、緑（Spain BB）：スペインの竿釣り、紺（Venezuela LL）：ベネズエラのはえ縄。

### 【資源評価】

2023年資源評価では前回（2020年）の非平衡プロダクションモデルであるmpbに加えて、資源統合モデルSS3を用いて資源評価が行われた（ICCAT 2023a）。今後のMSEのOM（オペレーティングモデル）としてSS3を用いる予定であることから、SS3の結果のみを資源状態の記載に用いた（ICCAT 2023a）。資源評価には1930～2021年のデータを用いた。

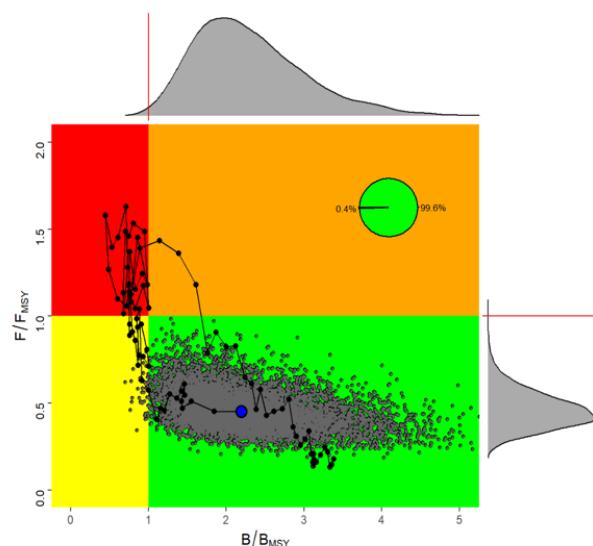
今回の資源評価では資源量指数として、2020年資源評価同様、漁業のデータの良質さ（カバーする海域・期間の多さや精度）を考慮し、かつ単位努力量当たりの漁獲量（CPUE）トレンドの相関から歴史的に類似のCPUEトレンドを示す5種類の漁業（台湾のはえ縄、日本のはえ縄（1988～2021年、ただし2013年は除く）、スペインの竿釣り、ベネズエラのはえ縄、米国のはえ縄）を抽出して用いた（図4）。

ベースケースモデルより推定されたMSYの中央値は41,995トン、 $SSB_{2021} / SSB_{MSY}$ の中央値は2.19、 $F_{current} / F_{MSY}$ の中央値は0.45であった。過剰漁獲でありかつ乱獲状態である確率は0%、過剰漁獲ではないが、乱獲状態である確率( $F / F_{MSY} < 1$ 、 $B / B_{MSY} < 1$ )は0.4%、過剰漁獲・乱獲状態にない確率( $F / F_{MSY} < 1$ 、 $B / B_{MSY} > 1$ )は99.6%と推定された（図5）。

### 管理方策

1998年までは漁獲努力量規制やTACによる規制等の管理措置は講じられてこなかったが、1999年から当該資源を漁獲対象とする漁船を登録し、入漁隻数が1993～1995年の平均隻数に制限された。さらに2001年からTAC及び国・地域別割当が設定された。2013年に行われた資源評価の結果を受け、2014～2016年のTACは2.8万トンに設定された。日本については、北大西洋ピンナガを目的とした操業を行っていないいた

め、ピンナガの漁獲量が大西洋全体のはえ縄操業によるメバチの漁獲量の4%以下になるよう努力するという規制が課せられた（ICCAT 2014）。2015年のICCAT年次会合において、北大西洋ピンナガにHCRを導入する勧告が採択された。具体的には管理目標として「神戸プロットの緑の領域、（即ち $F / F_{MSY} < 1$ 、 $SSB / SSB_{MSY} > 1$ の状態）に少なくとも60%で資源を維持しつつ、長期間の漁獲量を最大化させること」及び「資源評価によって産卵親魚量がMSY水準( $SSB_{MSY}$ )を下回っているとICCAT SCRSが評価した場合、遅くとも2020年までの可能な限り早い段階で少なくとも60%の確率で資源をMSY水準以上の状態に回復させること」の2点を設けた。

図5. SSモデルで推定された神戸プロットで表す北大西洋ピンナガのMSYを基準とした相対資源量( $B / B_{MSY}$ )と相対漁獲係数( $F / F_{MSY}$ )の推移 (ICCAT 2023b)

黒線：資源状態の軌跡、黒点：年別の資源状態、青点：2021年の資源状態、灰色点：2021年の資源状態の不確実性を示す。

2016年のSCRSでは、この勧告及び2016年の将来予測の結果を受け、漁獲規制ルールに用いる管理基準値として  $F_{MSY}$  を下回る  $F_{target}$ 、 $B_{MSY}$  を上回る  $B_{threshold}$  の値（漁獲死亡係数を削減するかどうかの閾値となる資源量）を設定することで2015年の委員会勧告の目標を達することができると勧告した（ICCAT 2016）。

2016年のICCAT年次会合において、2017～2018年のTACは2.8万トン、2019～2020年は3.0万トンに、なおかつ、その間にHCRが採択された場合はそれに応じてTACも見直されることが決定された。2017年のICCAT年次会合において、MSEによる検証を経て、新たなHCR ( $F_{target} = 0.8 \times F_{MSY}$ 、 $B_{threshold} = 1 \times B_{MSY}$ 、TACの変更は3年ごとかつ変更幅は最大20%)が採択されたことにより、2018～2020年のTACは33,600トンに改定された（ICCAT 2017a、2017b）。2020年のICCAT魚種別会合において、採択済みのHCRにより2021～2023年のTACは37,801トンと勧告され（ICCAT 2020）、2020年ICCAT年次会合は中止となったが、代替のメール協議にてこのTACを含む決議改定を採択した（ICCAT 2021）。また、2021年のICCAT年次会合において、HCRを含むMP（管理方式）が採択され、以後、MPに基づいてTACが計算されるようになった。2023年のICCAT SCRS会合では、採択済みのHCRにより2024～2026年のTACは47,251トンとなり、従来のTACから9,450トン増加した（ICCAT 2023a）。

2023年のICCAT年次会合において、全体のTAC及びそれに応じた国別割り当て（2024～2026年）を含む管理措置が採択され、日本について2024～2026年は2021～2023年に引き続いて北大西洋ピンナガの漁獲量が、大西洋全体におけるはえ縄によるメバチの漁獲量の4.5%以下になるよう努力する規制が勧告された。

## 執筆者

かつお・まぐろユニット

かつおサブユニット

水産資源研究所 水産資源研究センター

広域性資源部 まぐろ第2グループ

松原 直人・松本 隆之

## 参考文献

- Bard, F.X., and Compean-Jimenez, G. 1980. Consequences pour l'évaluation du taux d'exploitation du germon *Thunnus alalunga*. Nord Atlantique d'une courbe de croissance debuite de la lecture des sections de rayons epineux. Col. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 9(2): 365-375.
- ICCAT. 2014. Report for biennial period, 2012-13 PART II (2013) - Vol. 1. 451 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/BienRep/REP\\_EN\\_12-13\\_II\\_1.pdf](https://www.iccat.int/Documents/BienRep/REP_EN_12-13_II_1.pdf) (2024年12月6日)
- ICCAT. 2016. Executive summaries on species. ALB-

- Albacore. /n ICCAT (ed.), Report of the Standing Committee on Research and Statistics (SCRS) (Madrid, Spain, October 4-7, 2016). 425 pp.  
[http://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2016\\_SCRS\\_ENG.pdf](http://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2016_SCRS_ENG.pdf) (2024年12月6日)
- ICCAT. 2017a. Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Madrid, Spain 2-6 October 2017). ICCAT, Madrid, Spain. 465 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2017\\_SCRS REP\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/Meetings/Docs/2017_SCRS REP_ENG.pdf) (2024年12月6日)
- ICCAT. 2017b. Recommendation by ICCAT on a harvest control rule for the North Atlantic Albacore supplementing the multiannual conservation and management programme, REC. 16-06 [Rec. 17-04]. 7 pp.  
<https://www.iccat.int/Documents/Recs/compendiopdf-e/2017-04-e.pdf> (2024年12月6日)
- ICCAT. 2020. 2020 SCRS ADVICE TO THE COMMISSION. Report of the 2020 ICCAT Atlantic albacore stock assessment meeting (Online, June 28-July 8, 2020). 355 pp.  
[https://www.iccat.int/Documents/SCRS/SCRS\\_2020\\_Advice\\_ENG.pdf](https://www.iccat.int/Documents/SCRS/SCRS_2020_Advice_ENG.pdf) (2024年12月6日)
- ICCAT. 2021. Report for biennial period, 2020-21 PART I (2020) - Vol. 1. 335 pp.
- ICCAT. 2023a. Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Madrid, Spain, 25-29 September 2023). ICCAT, Madrid, Spain. 95-105 pp.
- ICCAT. 2023b. Report of the 2023 ICCAT Atlantic albacore stock assessment meeting (Hybrid, 26-29 June, 2023). 66 pp.
- ICCAT. 2024. Report of the standing committee on research and statistics (SCRS) (Madrid, Spain, 23-27 September 2024). ICCAT, Madrid, Spain. 69pp
- ICCAT. 2025. Nominal Catch Information [last update 2025-01-31]. [https://www.iccat.int/Data/t1nc\\_20250131.7z](https://www.iccat.int/Data/t1nc_20250131.7z) (2025年2月3日)
- 西川康夫・本間操・上柳昭治・木川昭二. 1985. 遠洋性サバ型魚類稚仔の平均分布, 1956-1981年. 遠洋水産研究所Sシリーズ 12. 遠洋水産研究所, 静岡. 99 pp.
- Ortiz de Zarate, V. 1987. Datos sobre la alimentación del atún blanco (*Thunnus alalunga*) juvenil capturado en el Golfo de Vizcaya. Col. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 26(2): 243-247.  
[https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV026\\_1987/n\\_2/CV026020243.pdf](https://www.iccat.int/Documents/CVSP/CV026_1987/n_2/CV026020243.pdf) (2024年12月6日)
- Santiago, J. 1993. A new length-weight relationship for the North Atlantic albacore. Col. Vol. Sci. Pap. ICCAT, 40(2): 316-319.

## ピンナガ（北大西洋）の資源の現況（要約表）

世界の漁獲量 (最近 5 年間)	28,182～34,922 トン 最近（2023）年： 28,182 トン 平均： 31,473 トン（2019～2023 年）
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	225～334 トン 最近（2023）年： 302 トン 平均： 281 トン（2019～2023 年）
資源評価の方法	非平衡プロダクションモデル（mpb）及び統合モデル（SS3）
資源の状態 (資源評価結果)	$SSB_{2021} / SSB_{MSY} = 2.19 [1.21 \sim 4.01] ^*$ $F_{current} / F_{MSY} = 0.45 [0.29 \sim 0.71] ^*$ 2021 年の資源状態は、乱獲でなく、過剰漁獲でもない
管理目標	MSY : 41,955 [38,860～45,130] * トン
管理措置	・入漁隻数の制限 ・TAC : 47,251 トン（2024～2026 年） ・漁獲管理ルール（HCR）を含む MP による管理 ・日本については漁獲量を大西洋全体におけるはえ縄によるメバチの漁獲量 4.5% 以下とする努力義務
管理機関・関係機関	ICCAT
最近の資源評価年	2023 年
次回の資源評価年	2026 年（予定）

\* [ ] は 80% 信頼区間を示す。